

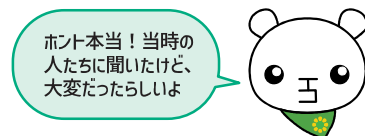
# 「市民力」のはじまり ～公害克服～



## 市民の誇り「七色の煙」が一転公害に

北九州市は古くから九州の交通の要所、石炭の集散地として栄えた街です。明治34(1901)年には八幡に官営八幡製鐵所が創業し、昭和の高度経済成長にも大きく貢献しました。当時、工場群から出される煙は「七色の煙」と繁栄のシンボルとして受け止められていたほどです。

しかし、街の急成長は、大気汚染や水質汚濁など公害の激化の始まりでもありました。昭和40年代はじめには、洞海湾は魚もすめない「死の海」として新聞でも取り上げられ、昭和44年には、北九州市で初となる「スモッグ警報(二酸化いおう)」が発令されるような状況でした。このとき、いち早く立ち上がったのが戸畑の婦人会でした。北九州市が誇る「市民環境力」の礎となった、お母さんたちのこの勇気ある活動がきっかけとなり、市民・企業・行政は一丸となって環境改善に取り組みました。



©ていたん&ブラックていたん、北九州市



工場を視察する婦人会  
(林えいだい氏撮影：ありらん文庫所蔵)

## 奇跡の環境再生

企業は、それまでのエンドオブパイプ対策(排出口で汚染物質を処理する方法)に加え、経済発展を進めながら公害対策、環境改善を進めるという難題に、技術者のプライドをもって応えました。いわゆる「クリーナープロダクション技術」です。あらゆる視点から生産技術を見直し、エネルギーや水、原材料の使用量を減らしたり、副産物を再利用することによって、汚染物質そのものを減らす技術を確立したのです。

このような環境改善と経済発展を両立させた技術革新は公害を克服しただけでなく、世界をも驚かせました。



産学官民が一体となって、公害防止に取り組んでいたんだね

子供たちのためにも頑張ったんだね♪



北九州市長と企業の協定調印風景

## ともに乗り越え国際協力へ

行政でも公害対策の強化拡充を進めました。公害対策課の設置(昭和40(1965)年)など監視体制の整備、全市的な大気汚染常時監視網の整備(昭和45(1970)年、公害監視センター運用開始)などです。なかでも、「公害防止協定(昭和42(1967)年9月、第1号締結)」は、法令に基づく規制を補完し公害防止の実効性を高める手段として大きな役割をはたしました。

こうした取り組みが実を結び、徐々に環境は改善し、昭和60年代には現在のような青空や海を取り戻し昭和62(1987)年には「星空の街」に認定されました。その後も環境改善は進み、現在に至るまで環境基準を大きく下回っており、近年では、皿倉山からの夜景は「新日本三大夜景」の一つに選ばれるほどになりました。

このように深刻化した公害を克服した北九州市は、その過程で培った環境再生技術を応用して、国際協力に取り組み、北九州市は環境保全技術などをアジアの開発途上国に伝え、経済発展と環境保全の両方を支援しています。



この人に訊いてみた

タカミヤ環境ミュージアム 元館長 中藪 哲さん

北九州市は稀有な街です。公害を克服する過程でも行政と企業が良好な関係を維持していたので、当時、国内外どこにもそんな都市はないと聞いたことがあります。私が入職したのは、ちょうど公害監視センターのテレメータシステムが運用開始した日でした。今日ではリアルタイムで映像共有も可能ですが、当時のスモッグの警報発令は朝から晩まで監視を行い、緊急時の監視体制は特に大変でした。しかし、行政の熱意と企業の努力によって、事後対応から予測対応へ、そして一時的な対応から恒久的な対応へと取り組みの内容は深化しました。おかげで、国の環境基準見直しの動きなど難局も乗り切ることができました。その後も「星空の街コンテスト」に選定されたことによって、市民の意識を「公害の街」というマイナスからプラスへ転換でき、今日の国際的な環境協力へとつなげられたと思います。

